られてあはれなれ、

〔富士紀行〕十三日、〇永享四年九月、中略、参河國八橋にて、

八橋のくもでに渡るひまもなし君がためにといそぐたび人

〔覽富士記〕参河國八はしにいたり侍て、はる〳〵きぬるとながめ侍し往躅もおもひ出されて、そぞろに過がてにぞおばえ侍し、

聞わたるくもでゆかしき八橋をけふはみかはす旅にきにけり

〔富士歷覽記〕十九日〇明應八年五月　八はしを見に、人々さそひまかりてみ侍れば、き、をよびしより、かたちもなくあれはて、かきつばたなども、心うつくしくみえ侍らず、あはれなるこ、ちしてよめる、

かつらぎの神はわたさぬ八はしもたえてかずなきくもでなりけり

かぎりあれば思ひわたりしやつ橋を七十ちかき齡にぞみる

杜若みながらたえてむらさきの一もとのこる花だにもなし

〔東國紀行〕八橋のわたりはいづかたぞなど事どひ過るに、はるかなる野あり、東の雲まに雲かあらぬかなどおもふほどに、富士成けりといふ人あり、おどろきあへり、

八橋や思ひわたりし富士のねを雲のはつかにけふみつる哉、といひつ、わしづかの寺内一見してわかれたり、

〔宗長手記〕此國〇参河　折卽俄に矛盾すること有て、矢作八橋をばえ渡らず、舟にて同國水野和泉守館苅屋に一宿、

〔永祿元年海道宿次〕鳴海、沓掛、八橋、矢波木、

〔遊囊賸記六〕八橋ハ永祿ノ初、古驛尙存セリ、其後何レノ時ヨリ今ノ道ヲ開カレケルニヤ、在原